

高齢者向けパソコン教室を通じた 学習環境のデザイン

吉村 友佑 中村 雅子 後藤 正幸

Lave&Wenger (1991) が提唱した「状況的学習論」に基づいた見方で学習を捉えることを通じて、学習者を取り巻く学びの環境のデザインが重要視されるようになってきている。本稿では、2005年に第1回を実施した高齢者向けパソコン教室（武蔵工業大学・横浜キャンパスにおいて後藤研究室・中村研究室と東山田地域ケアプラザの共催で実施）の成功を踏まえ、これをさらによりよい実践へと発展させるために、上記のような学習環境のデザインの視点からの改善提案を盛り込み、その成果について検討した。その結果、従来周辺的と考えられてきた学習者の視点にたった学習環境への配慮が、学習者にとって重要な要素であることが検証された。

キーワード：高齢者向けパソコン教室，地域貢献，状況的学習，学習環境デザイン

1 はじめに

従来の教育学では、学習は個人を単位として何らかの基準に達する過程として描かれ、どの方法で、何回練習をすれば効果が上がるかというように、外部から決められた固定的な学習内容を、学習者がいかに効率的に取り込めるか、という観点で成果が評価されてきた。このような観点では学ぶべき実践や活動は不変で、その意味は学習者にとって外部から与えられるものと捉えられている。

これに対して Lave&Wenger (1991=1993) は、人々が学ぶということについて状況的学習論という新しい観点を提唱した。彼らは、実践的な諸活動を行う人々がどのようにそれを実践できるようになったのか、ということについて、ユカタン半島の産婆、海軍の操舵手、肉加工職人の徒弟制などの事例を紹介しながら、人々が何かを学ぶとき、それは実践や活動の変化として捉えられるとしている。

そもそも固定的で変化のない実践など、現実にはありえないことを考えれば、このような捉えの方がより現実の人々の学びに近い（茂呂，2000）。この観点では、学習とは個人の内的過程や達成ではなく、コミュニティ単位で捉えられる、社会的・文化的なシステムの変化ということになる。

Lave & Wenger (1991=1993) はこのような観点到に立ち、「教育のカリキュラム」と「学習のカリキュラム」を区別した。学習のカリキュラムは、新しい実践の即興的な展開のために状況に埋め込まれた機会からなる。つまり学習者の視点から見て日常実践における学習の資源が置かれた場である（同書，邦訳 p. 79）。それに対して、教育のカリキュラムは、これとは対照的に外からの視点で学習されるべきことの意味が教え手から媒介される。

学び手の支援を考えたとき、この学習のカリキュラムに着目することで、どのように豊かに学習のリソースや機会を埋め込むことができるか、と言う観点で、より有効な学習環境が構築できるはずである。

このような観点を踏まえ、2005年に第1回が実施され、大きな成果を収めた高齢者パソコン教室の第2回の実践をフィールドに、コミュニケーションの活性化によって、学び手の主体的な関与を増し、学習者が支援学生や学習者相互の存在も含めて、活用できる学習の資源・リソースを充実することを試みた事例を紹介する。

実際には、教室自体の大きな枠組は、さまざまな事情から前回と大きく異なるものではなかったが、同じような制約の中でも、上記のような観点到に立つことで、どのような工夫が可能かの例として、その検証を行った。

2 高齢者向けパソコン教室の経緯

2.1 第1回の実施

高齢者向けパソコン教室は、2005年に東山田地域ケアプラザ（以下ケアプラザ）と武蔵工業大学環境情報学部後藤研究室・中村研究室によって第1回が開催された。目的や第1回の開催の経緯についての詳細は後藤ほか（2006）に述べられているが、地域のケアプラザや、地

YOSHIMURA Yuusuke

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科 2006 年度卒業生

NAKAMURA Masako

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科准教授

GOTO Masayuki

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科准教授

域ボランティア, さらにそこに関わる高齢者らの要望と, 本学部としての関心が重なったことで実現されたものである. 本学部としては, 特色の一つである地域に開かれたキャンパスという趣旨にのっとり, 保有する高度な情報機器・ネットワークを, 地域貢献のために提供するとともに, このような教室の運営・支援を, 学生たちが主体的に行うことによって, 学生にとっても貴重な実社会との接点となり, 学生自身の学習にとっても有益であるとの期待があった.

すなわちこの高齢者パソコン教室の実践は, 高齢者の学習環境のデザインを行うと同時に, 参加する学生にとっての学習環境のデザインを行うことでもあった.

結果として, この第1回の教室は, 学生のきめ細かなサポートのある講座として受講生にも非常に好評だった(後藤ほか, 2006).

実施にあたっては, 学外の地域ケアプラザとの連携, 地域のパソコンボランティアグループとの連携, 学内からも教室・ネットワーク環境などの協力を得たのはもちろんのこと, 情報メディアセンターほかの事務局担当部署の協力, ボランティアとして応募した一般学生や研究室配属学生の協力など, さまざまな立場からの協力が成果につながった. 当初, 本パソコン教室は単年度プロジェクトで, 継続的に行う意図で企画されたものではなかったが, 第1回の受講生やケアプラザなどから強い要望を受け, また第1回に関わった学生, 教員らも本プロジェクトに大きな意義を感じたことから, 2006年に第2回を開催するに至った.

3 第2回教室のための学習環境のデザイン

第2回の実施に当たって, 昨年の成果と反省を踏まえた改善への目標が立てられた. 後藤ほか(2006)に見るように, 第1回のパソコン教室でも学生と高齢者らの相互交流がプロジェクトテーマの一つではあったが, 今回は前述の学習環境のデザインという観点に立って, より意識的に互いのコミュニケーションが生まれやすい環境を作り上げるよう設計した.

受講生, ボランティア学生, 地域ボランティアの相互のコミュニケーションが活発であればあるほど, 教室への関与が増し, 気軽に質問や教えあいが生まれ, 学びのコミュニティ(Lave&Wenger, 1991=1993)としての教室が活性化すると期待からである. まず, そのような場作りのために, どのような準備・設計が行われたかを紹介する.

3.1 準備

筆者の一人(吉村)は, 前回の第1回パソコン教室でもリーダーの一人だったが, 教室終了後, ケアプラザで

行われていたフォローアップのためのパソコン相談室にボランティアとして参加することによって, 高齢者のパソコン教室に対するニーズを探ると共に, ケアプラザ職員の方との打ち合わせを行った. また, 他的高齢者向けパソコン教室の現状を調査するため, 青葉区の地域ボランティアが運営するパソコン教室である「あおばパソコン横丁」を見学するなど, 実際に自分たちの行ったパソコン教室と比較し先行事例からノウハウを学んだ.

学生アシスタントは昨年より早く, 6月から募集を開始した. 前回は学内ポータルサイトによる呼びかけだけであったが, ポスターやチラシ, 学内プラズマディスプレイなどを用いて呼びかけを行った. しかし結果は非常に厳しいもので昨年も参加してくれた数人の学生ボランティアしか集めることができなかった. その段階で集まった学生ボランティアをコアメンバーとして教室のカリキュラムや運営についてのミーティングを行った. ボランティア学生の募集は, 教室開催直前まで続したが反応は乏しく, 結果的に9月に後藤・中村両研究室の3年生に学生ボランティアとしての参加を依頼した.

本来の予定では1~2ヶ月前に学生を集め終え, アシスタント自身の学習やコンセンサス形成を進める予定だったが, 現実には当初予定していたアシスタント教育は十分に行うことが出来なかった. 9月27日の第1回目の授業に向け, 直前に学生アシスタントに集まってもらい, パソコン教室の概要, 高齢者との接し方, 授業の進め方などについての説明を行った.

3.2 カリキュラムの設計

基本的な構成は昨年同様であり, 全7回で, テキストも基本的には前回のものを踏襲して多少の改善を加えた. プログラムは, 前同様, 最終回に学習成果の発表会という形で設計した. 一方, 変更点として, 前回は第3回だったデジカメ撮影を第2回に行い, 前回はメモ帳を使った日本語入力だけだったが, 今回は要望が多かったワープロを4, 5回に解説することとした(表1).

表1 教室カリキュラム

第1回目	パソコンの基礎
第2回目	デジタルカメラ撮影・画像取り込み
第3回目	文字入力
第4回目	word
第5回目	word
第6回目	作品作成
第7回目	作品発表会

コミュニケーションの促進という点で、前回から変更して加えた工夫がいくつかあるが、ここでは、懇親会の設定の仕方、グループ単位の変更などを中心に紹介する。

懇親会：昨年度は、第1回、第2回の授業終了後に懇親会を行ったのだが、受講生に開催がうまく周知されておらず、ほとんど参加が得られなかった。今回はその反省を受け、申し込み当初から第1回に懇親会があり、できれば全員参加して欲しいとのPRを行って、第1回授業終了後に食堂2階のカフェを使って開催した。

学習時のグループごとにまとまって座り、各グループに担当の学生アシスタントを配置した。また懇親会には、地域ボランティアや地域ケアプラザの担当者、研究室教員らも参加した(図1)。



図1 懇親会の様子

デジカメ撮影会の日程変更：昨年は第3回に実施し、受講生同士や学生との交流が深まったと好評だった「デジカメ撮影」のカリキュラムを第2回に持ってくることにより、より早い段階で教室に対する参加意識を高いものにしてもらおうと考えた。

グループ構成：昨年は受講生を2人1グループとして、アシスタントをつけたが、結果としてグループ内でのコミュニケーションは行われていたが、グループ間でのコミュニケーションは皆無であったことがわかった。今回は交流の促進を図るため受講生4人、アシスタント2名で1グループを構成することとした。

4 実施の概要

4.1 教室形態

(1) グループ構成

前述のように、授業当日、3～4名1組の受講生に対して、学生アシスタントが基本的に2人つき、1人あたり2名の受講生を担当して支援し、カルテ(注1)をつ

けた。配置として通路の左右に担当受講生がいる間にいて、受講生をサポートしやすいようにした(図2)。

当日、学生にはカルテの他に「タイムテーブル」、「座席表」、「グループ分け表」、「作業内容」、「前回までのカルテ」などをバインダーに挟んでネームプレートと一緒に個別に配布、回収を行った。授業開始前はそれぞれ「パソコンセットアップ」、「案内」、「受付」と学生を役割分担し、それぞれの役割に即した作業を行った。

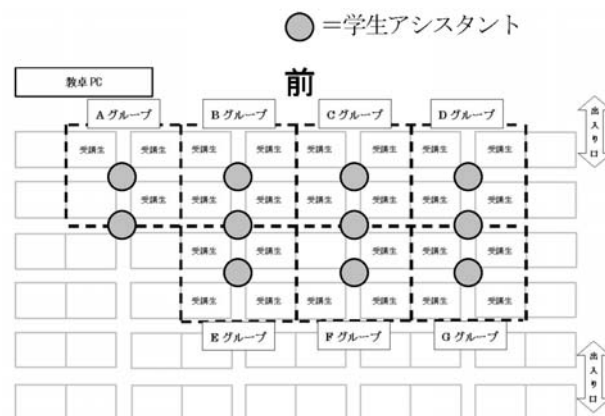


図2 当日の人員配置

(2) 講師、講師アシスタントについて

毎回の講師は、4人の学生が交代で務めた。当日はその回の講師の作成したタイムテーブルにそって授業を進行した。講師と講師アシスタント、および有志の学生は前日にリハーサルを行い授業の進行を確認した。当日、講師はスクリーン前で指示棒を持って講義を行い、講師アシスタントは講師用のパソコンやOHPを適宜操作するなど、講師のサポートを行った。

(3) 地域ボランティアについて

前回は、これまでケアプラザで行われてきたパソコン教室などで講師やボランティアを行ってきていた方々が、アシスタントとして参加して下さった。豊富なノウハウを持っており、カリキュラム、テキスト作成時にも反省会の時にも多くのアドバイスを頂き、様々なアドバイスを頂いた。今回も同様に当日のサポートを行ってもらったが、2回目ということもあり前回と違って個別にグループにつくという形ではなく、全体を見てもらい、反省会でアドバイスしてもらおうという形でサポートを受けた。

4.2 当日の概要

武蔵工業大学横浜キャンパス情報メディアセンター中演習室にて2006年9月27日～10月12日までの毎週水曜日・土曜日に全7回で実施。13時受付開始で13時30分から1ターム1時間の2ターム形式で授業を行った(表2)。

今回受講生は都筑区の広報を用いて公募を行った結果

表2 当日のタイムスケジュール

	時間	作業内容
前日	17:00	リハーサル
当日	12:30	学生ボランティア打ち合わせ
	12:45	会場設営等準備開始
	13:00	受付開始
	13:15	代表者・講師は地域ボランティアとミーティング
	13:30	前半授業開始
	14:30	休憩
	14:45	後半授業開始
	15:45	授業終了、地域ボランティアとのミーティング
	16:30	学生ボランティアとの反省会
	18:00	終了

31名の応募があり、キャンセル等を含め最終的に26名の受講生を迎えることになった。当日の学生アシスタントはシフト制で管理し、1日平均18名程度の学生アシスタントが参加した。

授業開始前の地域ボランティアとのミーティングでは講師と講師アシスタント、代表者が参加して当日の授業の流れを配布資料（タイムテーブル、座席表）をもとに確認し、授業後にはその日気づいたことや注意点をそれぞれコメントしてもらった。反省点については学生ボランティアの反省会で伝えて情報を共有し、学生からのコメントや意見を出してもらった。そこで挙げた意見はその日のうちにまとめてメーリングリストによって学生に配信し、反省点はPDCAサイクルに基づき次回にフィードバックした。

5 第2回教室の成果と考察

成果の評価のために用いたデータは、

- ・教室の第1回と最終回に受講生に行ったアンケート
- ・学生につけてもらっていた受講生カルテ
- ・教室終了後に、了承を得られた受講生のお宅に後日訪問して行ったインタビュー調査
- ・事後のケアプラザでのパソコン相談室での参与観察などである。

また状況的学習論の観点から、学習効果として、スキル面だけでなく、教室への関与や、パソコンに対するイメージの変化、教室後の継続的な学習意欲や、アイデンティティにおける変化なども含めることとした。

5.1 教室全体への評価

前回同様、受講生アンケートでも、地域ボランティアからも非常によい評価を得た。最終回の発表会では受講生の作品を自分で紹介してもらおうと同時にパソコン教室に対するいくつかのコメントを聞くことができたが、その中でも「こんなパソコン教室はいままでなかった」などのコメントを頂いた。

都筑区からも「都筑区地域福祉保健活動100選」に選

ばれるなど、大学と地域との交流は第三者からも高い評価を受けた。



図3 パソコン教室の実施風景

5.2 学習環境デザインとしての結果と評価

今回、参加者の交流によるコミュニティ形成を意識しながらパソコン教室の設計・運営を行い、これまでに述べてきたような新たな試みを導入し教室を行った。

「学習のカリキュラム」という点に着目して学習環境をデザインした効果は、客観的なデータとして、捉えることが困難である。学習のカリキュラムは、参加者のアイデンティティや、実践の変化として主観的に経験されるからである。

しかし実際にそのフィールドに参加し、受講生や学生ボランティア、またその他のその場にかかわりのあるさまざまな人との生のコミュニケーションを行うことで、そのような側面も検討可能であると考えた。

アンケート結果では、前回も今回も非常に評価が高いため、直接、計量的に「学習環境のデザインを考慮したことで昨年よりも大幅な学習効果の向上がみられた」と結論づけることは難しかった。しかしインタビュー調査や参加観察を行うことで、「懇親会をはじめにやったのは非常によかった」「また今度（パソコン教室が終わってから）集まることになってるの」などの参加者自身の語りを得ることができた。これらはコミュニティ形成による関与の向上や、今後の学習意欲の向上という意味で受講生のパソコン学習への取組みの変化を示している。また教室で習ったことの復習を9割の受講生が行っていたほか、今後、他のパソコン教室に参加したいか、他の地域活動に参加したいかなどの質問でも意欲的な回答が多かった。

また今回は検証内容には含めていないが、受講者との会話の中でよく聞こえた声で「普段家族の方にもこんな接し方をしているの?」、「いまどきの若者とは思っていたけれど・・・」（付録①）というように、「大学生」というものに対するイメージが好意的なものに変わった

ことを示す発言が目立ち、事後のアンケート調査でも「大学生ともっと話をしたいと思いますか」という質問項目に対し、9割以上の受講生が肯定的な回答をしていた。図4は、学生と受講生の会話について、学生カルテに基づいて前回、今回の第1回～第3回を比較したものである。上段が2005年、下段が2006年で、A良好～D悪いの4段階評価を行っている。昨年は第3回のデジカメ撮影から急にコミュニケーションが活発になったが、今回は第1回から良好であったことが確認される。

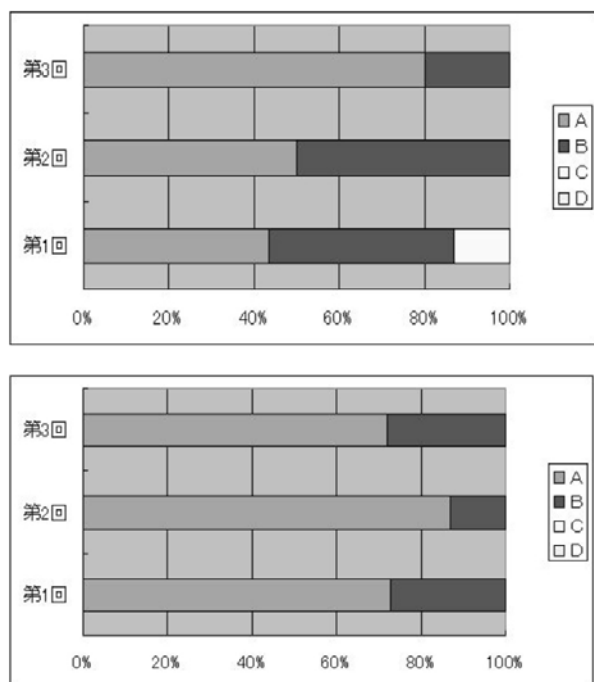


図4 学生と受講生のコミュニケーション
(上段が2005年、下段が2006年)

一方、参加したボランティア学生についていえば、既に述べたように、昨年度と今回で学生アシスタントの参加の仕方、意識とも大きく異なっている。

前回リーダーの田中は後藤研究室の学生であり、プロジェクトの早い段階から後藤研究室の学生の協力を得ることができており、ボランティア学生のプロジェクトに対する理解も高かったと思われる。その結果、当日のアシスタントでもその場の状況変化に応じて柔軟に対応することができ、教室に対する参加意識も総じて高いものになっていた。今回は中村研究室の吉村がリーダーであったことから、早い段階で後藤研究室の学生とコミュニケーションを取ることができず、プロジェクトに対する参加意識が明確に理解されていなかった者もいた。前回はなかった無断欠席や遅刻が見られたという点から考えても、学生のプロジェクトに対する参加意識が相対的に低くなってしまっていたのではないかと考える。

しかしそうした中でも参加の過程で学生にも変化が現れ、教室の始めの段階では考えられなかったことだが、

教室終了後に次年度に向けて、3名の学生が、リーダーとしてプロジェクトを引き継ぎたいと申し出た。これは実際に教室に参加することで本プロジェクトに意義を見出すに至った結果といえよう。

また学生への事後アンケートから、教室に対して多くの参加学生が意義を高く評価しただけでなく、学生の高齢者に対する意識の変化も見られた。

大部分の学生が高齢者に対するマイナスイメージの項目で参加前に比べて「そう思わなくなった」、プラスイメージの項目では変化なしか「そう思うようになった」と回答しており、高齢者に対するイメージの変化が参加前と後で改善されていた(吉村, 2007)。

5.3 プロジェクト運営についての評価

上述した通り、プロジェクトとしての最終的な評価は非常に高かった。しかし運営面では多々問題が発生していたことも事実である。

(1) 受講生の募集

前回受講生の募集にはケアプラザ内で毎月発行されている「ケアプラ通信」によって25名の募集を行い、実質18名の受講生応募があった。これに対し今年には主に区の広報による募集を行った。定員は前回同様25名の募集を行ったところ31名の応募があった(実際はキャンセルや追加が発生し26名となった)。この2つの募集方法にはそれぞれメリット・デメリットがあり、前者はケアプラザ内だけと配布範囲は非常に限られてしまうが、記事掲載スペースは大きく、詳細な情報を載せることができた。それとは対照的に広報では区内全域に配布され広く告知することができるが、掲載スペースが小さく、限られた必要最低限の情報しか載せることができなかった。この結果、今回は学内での駐車場のトラブルや、初回到教室の場所がわからないなどのトラブルが前回にくらべて明らかに多かった。また、受講生のレベルのばらつきが前回に比べて大きかった原因もそれではないかと思われる。

(2) 学生ボランティアの募集

前回の場合も純粋にボランティア志願した学生は3名だった。パソコン教室の準備・開催にあたっては、学生ボランティアは必要不可欠なリソースである。前回の場合も少なく見積もっても15名の学生ボランティアが必要であり、後藤研究室の学生や院生の協力を仰ぐ形となった。ただし、当初からボランティアで応募した学生と、依頼による学生に必ずしもモチベーションに差があったわけではない。

今回は前回に比べて受講生の数も増えたため、必然的に必要となる学生ボランティアの数も増えた。前回の反省から、募集時期を早め(5月下旬～)、募集方法も多様にしたが、残念ながら新たな学生ボランティアの参加は見られなかった。このため後藤、中村両研究室の学生の

協力を仰いだ。最終的には、それぞれのゼミ活動の一環として参加してもらった形になった。しかし昨年と違い、直前に協力を依頼する形になったために、問題が発生した。事前に十分な情報を伝えることができなかつたり、学生側のパソコン教室に対する参加意識が高まらないなどといった点や、筆者の一人（吉村）はリーダーではあるが、頼んで協力してもらったという負い目から、十分にボランティア学生に要望を伝えることができないという悪循環が生じてしまった。

これらの結果、学生ボランティアの一部に不満が生まれたり、無断欠席や遅刻など、前回ではなかったような行動が見られた。しかし今回、幸いにも早い段階でこのような不満を拾いあげることができ、教室の前半の段階で、これまでの経緯を改めて詳しく説明する機会を設けてこの問題の解消を図ることができた。

このことからプロジェクト・メンバの間でも緊密なコミュニケーションが不可欠であり、それがメンバーのモチベーションを高め、結果的に受講生と接する態度にも変化が生まれ、教室全体の質の向上につながるといえる。

また今後は募集方法や学生へのアプローチの方法を考え、なるべく早い段階から学生ボランティアの協力を得られるようプロジェクト全体のシステムから見つめなおしていく必要があるだろう。

6 まとめ

本プロジェクトはこれまで書いたように参加した学生ボランティアの努力の甲斐あって成功を収めることができた。

今回の結果では天井効果（注2）などにより、計量的な成果の評価を行うことは難しかった。しかし学習環境を考慮して、コミュニケーションを重視した学びの場をデザインすることで生まれる学習効果の向上は、さまざまな側面のデータを総合すると、検証されたといえよう。このような観点は今後の教室運営の中でも必要不可欠なものである。

今回、フィールドワークによって、受講生の側から若者に伝えたいことがたくさんあるということも明らかになった。今後は学生が一方向的に高齢者になにかを教えるだけではなく、高齢者の方からもさまざまな情報発信のできる場のデザインを行うことで、高齢者、学生双方に学びのうまれる環境をつくることも重要なのではないかとと思われる。

謝辞

本実践の取り組みでは、東山田地域ケアプラザの倉田宏子さんや、宮村佳菜枝さんを始めとする地域ボランテ

ィアの皆さん、そして齋藤倫克君をはじめとする20名以上の後藤、中村両研究室およびその他の学生ボランティアの皆さんにご尽力いただきました。改めて敬意を表すると共に深く感謝いたします。

（注1）カルテとは、個々の受講生の学習の様子や、技能の上達について記録し申し送りをするため、担当の学生ボランティアが毎回作成していた資料である。

（注2）測定尺度の上限に近い位置に大半の回答が集中することで分散が小さくなり、比較が困難になる現象をさす。

参考文献

- [1] 後藤正幸, 中村雅子, 倉田宏子, 田中愛子『高齢者向けパソコン教室の設計と運営による実践的教育』情報メディアセンタージャーナル第7号 2006
- [2] Lave, J. and Wenger, E. Situated learning : Legitimate peripheral participation 1991 『状況に埋め込まれた学習 : 正統的周辺参加』佐伯胖訳 産業図書 1993
- [3] 茂呂雄二「実践とエスノグラフィの意味」茂呂雄二編『実践のエスノグラフィ』金子書房 1-19 2001
- [4] 佐伯胖, 藤田英典, 佐藤学編『学び合う共同体』東京大学出版会 1996
- [5] 田中愛子『高齢者向け PC 教室の設計と評価』平成17年度武蔵工業大学環境情報学部後藤研究室卒業論文 2006
- [6] 上田信行, 古堅真彦, 森石峰一『情報教育のための学習環境デザイン』国際メディア研究財団 2000 <http://furu.imrf.or.jp/papers/00Kyouikukougakkai.pdf>
- [7] 上野直樹, ソーヤーえりこ編『文化と状況的学習』凡人社 2006
- [8] 吉村友佑『高齢者向け PC 教室を通じた学習環境デザイン』平成18年度武蔵工業大学環境情報学部中村研究室卒業論文 2007

付録

受講生に対するアンケートの自由記述欄の質問項目と回答（抜粋）を以下に示す。（）内は引用者の注。

①学生アシスタントに対して要望、またはよかった点がありましたら自由にお書きください。

●今回の対応はとても素晴らしい。2回参加できて学校の伝統のようなものを感じました。家ででの生活の中で家族にもこんな対応をしてもらっしやるのでせうか

(ママ)・・・是非聞きたい。(この回答者のみ、前回、今回とも参加)。

- いやな顔もせずに親切に教えて頂けた。適切な教え方。丁度孫と同年齢で打ち解けやすかった。
- これ以上望んだらばちが当たる位よくしていただきました。
- 学生は入れ替わってのアシスタントでしたが、みんなが親切で、気持ちのよい学生ばかりでありがたく感じています。
- いつも気持ちよく対応してくださって、わかる迄終了後も教えてくださった二人に一人がついていて下さった事にも感謝です。
- とてもやさしく教えてくださり、わからないことは他の人に聞いたりして、私にわかるまで教えてくださりありがたいと思いました。
- 理解が十分でない点、講師の言うとおりに画面が変換できなかったときなど、その都度、適切なサポートが得られてとてもよかったです。
- これ程まで親切にしてください、感謝しております。いまどきのと云っては何ですが、言葉遣い、態度全てにおいて驚くほど素晴らしい学生さんばかりでした。
- 親切に教えてくださったので言うことなし。
- 私達のクラスは水・土とアシスタントが違い、その点横の連絡が少しかけていたと思います。発表会の作品もそのような意味でGグループは少し出来が悪かったような気がします。

②プログラム全体や交流について要望、または良かった、悪かった点などがありましたら自由にお書きください。

- 1回2回と参加しましたが今度少し内容を深めて勉強した。ワード、エクセル、色々の分野をもう少し深めたい。
- 千葉から引越して2年ですがこのような地域交流が持てること大変幸せに思います。
- スタート時間が1時→いつのまにか1時半となり、気分的には、ゆったりとしていいのですが無駄な時間とも感じました。(当初から1時会場、1時半開始だったが、この回答者にはうまく伝わっていなかったようである。)
- 出来るなら、次のステップへと継続できるとよいのですが、席が離れてる人とはふれあえる時間があまりなかったのが残念です。
- グループ以外の人とも話したかったが時間が少なかった。又、この後も、みんなが集まり、いろいろ話し合える、グループとしての機会があったらよいと思う。
- 出来ることなら、もっと回数が多いと嬉しかったです。
- もう少し学生さんとのパソコン教室を通しての交流を望みたい。

- 今回は写真と言うテーマで募集があり写真の取り込み、印刷などと思っていたがワードの指導で大変勉強になった。

③その他ご意見や感想などありましたら自由にお書きください。

- 大変有意義な企画をしていただき感謝でいっぱいです。ありがとうございました。始めて1年くらいでやりたいこと一杯です。
- 次回は今回よりレベルアップした形で開催していただければ、次回も是非参加したい。
- ケアプラザの存在を知り、たのしく思います。
- 若い人(学生)に伝えたいこと、参考になるのではと思うことが沢山ある。世代間の交流、知恵の継承等の機会があったらと思う。
- 是非このような機会を又設けていただきたい。今回のような大変親切で感じの良い方々に教わりたいです。
- インターネットなどの講習会をよろしく願います。
- 通常の教室は先生が2～3人ですが今回は学生アシスタントの方にわからないことをすぐに聞くことが出来て大変良かったと思います。